

a piacere !

目次

第一楽章：Tenuto（テヌート／音を保って、重く）

第二楽章：Furioso（フリオーソ／荒々しく、激情的に）

第三楽章：Martellato（マルテラート／打ちつけるように）

第四楽章：Andante nostalgico（アンダンテ・ノスタルジコ／歩くように、郷愁をもって）

第五楽章：Cantabile con dolore（カンタービレ・コン・ドロレ／歌うように、痛みとともに）

第六楽章：Da Capo（ダ・カーポ／最初に戻って）

最終楽章：Encore（アンコール）

後奏：Sempre（センプレ／常に、いつまでも）

閉幕：解説・あとがき

開演に先立ちまして

本書は、原作者様・出版社様・その他関係者様とは一切関係のない、個人が制作した非公式のファンブックです。本書の内容はすべてフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

本書の無断転載・複写・複製・再頒布・転売・AI学習への利用を固く禁じます。ネットオークション・フリマアプリへの転売も禁

止です。公共の場での閲覧はご遠慮ください。処分の際は、中身がわからない状態にしてからゴミとして廃棄してください。

本書をお手に取る前にご確認ください

本書には以下の描写が含まれます。

- ・児童虐待の描写
- ・事故によるPTSDの描写

これらの内容に触れることで、フラッシュバックや体調の悪化を引き起こす可能性があります。ご自身の状態と相談しながら、無理のない範囲でお読みください。

本作はフィクションであり、いかなる犯罪・虐待行為も肯定しません。

もし心に辛さを抱えている方がいれば、どうかひとりで抱え込まないでください。専門機関や支援団体に、話してみることも選択肢のひとつです。あなたはひとりではありません。

以上をご確認いただけた方は、次のページへどうぞ。

まもなく、幕が上がります。

第一楽章：Tenuto（テヌート／音を保って、重く）

産まれたとき、私の体重は2000グラムにも満たなかった。未熟児であった私は、身体が弱く、発達も遅かった。何度も入院を繰り返して、母乳を吸う力もない。私はひどく手のかかる子供だった。そんな私の様子に、両親は次第に追い込まれていった。父のラウフェイは、母のファウルパウティを責めた。私がこんなにも弱いのは、息子を元気に産めなかったお前のせいだと、自らの妻を口汚く罵った。気が弱く繊細な母は、そうした父の言葉で心を病んでいった。母は世間の言う"正しき"に取り憑かれるようになり、私にもそれを強制した。私は黙ってそれに従った。それを拒めば、母が壊れてしまうと知っていたから、私は何でも母の言う通りにした。そうすれば、母は喜んでくれたし、落ち着いているように見えた。

一方、父は、弱く産まれた私を鍛えるためだと言って、厳しい英才教育を施した。私は父の厳しい指導にも耐えた。しかし、母とは違い、父は私がどれほど期待に応えようと努力しても、決して満足しなかった。むしろ、父が私に与えるハードルは高くなる一方で、私は、だんだん自分というものが、わからなくなかった。何をしても、父に認めてもらえない。泣き言を零せば、そんなことは言っただけで母に封じ込められる。そんな日々が続いた。

未熟児として産まれた私も、2歳になる頃には、身長・体重、発達ともに正常産児に追いついていた。そこで父は、私にピアノを始めさせた。

父も母も、音楽一家の生まれで、ヴァイオリン奏者だった。その二人の間に生まれた私も、同じくヴァイオリン奏者になることを望まれていた。ピアノはそのための土台作りで、私は手指の協調運動と楽譜の読み方を叩き込

まれた。そして3歳の誕生日、私は父から子供用のヴァイオリンを贈られた。それからは、ひたすらヴァイオリンの練習に打ち込んだ。父は厳格な人で、少しでもミスがあると演奏を止められ、はじめから弾き直すことになる。譜面通り、完璧に弾けることが父の考える理想系で、私は父に言われたことができなければ、何時間でも同じ箇所を練習させられた。母は私の身を気遣えど、父のそれを黙認していた。この家では誰も父に逆らえなかった。私は両親に従い、日夜を問わず、ヴァイオリンの練習に明け暮れた。そんな血の滲む努力の甲斐あってか、私は10歳で神童と呼ばれるようになった。

コンクールで演奏すれば、皆が私を褒めてくれる。メディアは私を名門音楽一家の一人息子で、類まれなる才能の持ち主だと評した。父は新聞記者に、「ロキは自慢の息子だ」と言って笑った。私はようやく誰かに必要としてもらえているような気がした。もっと頑張れば、父も母も喜んでくれる。もっと上手くなれば、皆が私を見てくれる。もっと練習しなくちゃ。もっと上手に、もっと完璧に、もっと——！

……そんなときに現れたのが、ソーだった。

ソーとはじめて出会ったのは、その年の冬だった。その日は朝から雨が降っていて、気温も5度前後とひどく冷え込んでいた。私は家の中で、窓の外を眺めながら絵を描いていた。空いている時間は全てヴァイオリンの練習に当てたかったが、その絵は学校の宿題として、提出しなければならぬものだった。空の絵を描きなさいと教師から言われていたが、冬のイギリスは殆ど雨が曇りで、分厚い雲が空を覆っている。その日もやはり曇天で、私は薄暗い空を灰色で塗っていた。するとそれを見ていた母が、ふいに私の腕を掴んだ。「ダメじゃない。こんな汚い色で塗っちゃ。ほら、こうして綺麗な青色で塗れば、いい絵になるわ」

母は、私の描いた雨空を、青の絵の具で塗りつぶし、快晴の青空にしてしまった。そのとき、私は、言葉が出てこなかった。やめてほしいと思ったはずなのに、母の"正しさ"を否定するだけのものを私は持っていなかった。確かに、こんな薄汚い雨空より、美しい青空を描いた方がいいだろう。例え、それが嘘であったとしても、青空の方がずっと綺麗だ。きっと、それが正しい。私はぐるぐると自分の中で渦巻く感情を飲み込んで、作り笑いを浮かべた。

もう一度窓の外を眺めると、家の前に父の車が止まっていた。母はそれを見るときに玄関へ迎えに行き、私もそれに続いた。窓の外には、二人分の雨傘が開いていた。

「この子は、ソー。亡きお父上、オーディンとは古い友人でね。今日から私が面倒を見ることになった。ソー、この子はロキ。私の息子だ。今日からお前たちは兄弟だ。二人とも、仲良くしなさい」

帰ってくるなり、父はそう言って、突然見知らぬ男を家にあげた。ソーは私の8歳年上で、そのときはもう18になっていた。10歳にもなって、急に兄弟が増えるとは夢にも思わなかったし、ましてや兄ができるなど、とても信じられなかった。私は驚いてしばらく口をきけなかった。母に促されてやっと私は「これからよろしく」と短い挨拶をして、ソーに手を差し伸べた。ソーは私の手を不思議そうに見つめるだけで、いつまで経っても握手をしようとしなない。私はムキになって、ソーの手を無理やり握りしめ、父に見せつけるように握手をした。するとソーは、そこではじめて私の存在に気付いたかのような面持ちで、「よろしく」とだけ言った。

家に来たということは、両親共に亡くなったのだろう。ソーは伸びきった金髪を顔にかけて、片目を眼帯で隠していた。

後からそれは両親を失った事故で負った傷だと伝え聞いたが、私にはそんなソーの姿が憂いを帯びた亡国の王子のように見えた。残ったソーの片目は、澄み切った蒼で、それはちょうど青空と同じ色をしていた。

▽

ソーの父、オーディンは世界的に有名な指揮者だった。オーディンは「全能の父」との呼び声も高く、指揮や指導だけではなく、作曲や演奏もこなしていた。そしてオーディンの指揮する交響楽団のコンサートミストレスを務めていたのが、ソーの母、フリッグだった。コンサートミストレスは、第一ヴァイオリンの首席奏者で、指揮者の意図を音楽に具現する役職だ。交響楽団を一つの国と見て、オーディンをその王とするならば、フリッグは献身的に王を支える王妃だった。ソーはそんな二人を両親に持ちながら、真剣に音楽を学んだことがない様子だった。父と私の前で披露したヴァイオリンの演奏も酷いもので、ソーは譜面を目で追いかけるので手一杯といった顔をしていた。事故で片目を失ったソーの視界は、以前より狭くなり、立体感を掴むことが難しくなったらしい。しかし、ソーの演奏の酷さはそのせいという訳でもなかった。ソーは、音楽に関して、素人同然だった。かろうじて譜面が意味する音階を理解することはできるが、それが腕の動きに繋がらない。音楽記号はろくに読めもしない。そんな状態のソーを見て、私は心の底から安堵した。私はソーに、神童の座を奪われることを危惧していた。ソーは世界的に有名な音楽家の遺児にして、一目見ただけで誰もが釘付けになってしまうほどの美貌の持ち主だ。そんなソーが美しい音色を奏でれば、人々は簡単に心を奪われてしまう。私は突如として家に入ってきた異分子を警戒し、その才能を恐れていた。

しかし、そんなものは杞憂に過ぎなかった。ソーの演奏は、リズムもピッチも滅茶苦茶で、10歳の私よりずっと下手くそだった。なんだ、こんなものかと私は笑い出したくなった。

父に促されるまま、私はソーに手本を見せてやった。私の演奏は、ソーよりずっと滑らかで正確だ。そうあるべきだと教えられ、そうなれるよう努力し続けてきた。ぽっと出の素人が演奏するのと吐き捨てるように、私はヴァイオリンを演奏してみせた。

その一週間後、父はソーにもう一度同じ曲を演奏させた。たった一週間でどこまで上達したか見てやろうじゃないか。どんな演奏をするか見物だ。私はそんなふうに着地の悪いことばかり考えていた。そのバチが当たったのだろうか。ソーは、たった一週間で、私より遥かに上手くなっていた。ソーは楽譜を一切見ずに、レコードでも再生するかのような面持ちで、堂々とヴァイオリンを弾いた。その演奏は見事だった。オーデインの威厳を思わせる荘厳な旋律は、神性すら感じさせる。ソーは正しく天才だった。私の努力など、ソーの前では亀の歩みに過ぎない。私が一小節弾けるようになったときには、ソーは一曲丸ごと弾けるようになっている。亀が走り始めた兎に追いつけるはずがなく、私は自分が凡才であることを痛感した。膨れ上がった自尊心は、あっけなく破裂し、私の平穩は崩れ去った。その日を境に、私の生活は一変した。父はソーにばかり目をかけるようになり、母もソーは可哀想な子だからと、ソーばかりかまうようになった。私は悔しさに歯噛みした。生まれてはじめて、喉が焼け付くほどの怨嗟を抱いた。嫉妬で臓物が煮えくり返り、憎悪で脳が焼け落ちそうだった。

私は、どんな手を使ってでも、ソーの才能を手に入れたかった。

「兄上、何の練習をしているんですか？」

私はわかりやすい猫撫で声を出して、甘えるようにソーに擦り寄った。

兄を慕う弟の顔で、その秘密を聞き出してやろうと企んでいた。そんな私の心など露知らず、ソーは"兄上"という呼び方を大層気に入ったようで、嬉々として自身の練習方法を私に教えた。

どうやらソーは、生まれつき目と耳が良いらしい。感覚が他者の何倍も鋭敏で、一目見ただけで動きを完璧に覚えてしまうほどの記憶力の持ち主でもあった。何でも、ソーの父、オーデインは見て覚えろというタイプの指導者だったようで、ソーは幼い頃から見る目を鍛えられてきた。さらに、ソーは幼少の頃から音楽に囲まれ、常にトップクラスの演奏家の技術を見て育った。そういった特殊な環境がソーの才能を育てたのだろう。父は、ソーに特別な指導をしているわけではなく、ただ基本的な音楽理論を教えているだけのようなだった。楽譜すら満足に読めないソーが、勉強としての"音楽"を習っていないのは明白で。しかし、その欠けていた基礎さえカバーしてやれば、あっという間に稀代の天才になれるだけの素質を秘めていたのだ。ソーは恵まれた才能を持ちながら、この家に来るまで、練習と言えるほどの練習をしたことがなかったらしい。オーデインとフリッガも、私の両親と同じヴァイオリン奏者でありながら、ソーに音楽の道を歩ませようとはしていなかった。

「ほら、これが俺の父上と母上だ。いい写真だろう？」

そう言ってソーが見せた一枚の家族写真の中心では、サッカーのユニフォームを着たソーが、金のトロフィー掲げながら笑っていた。傍らに寄り添うオーデインとフリッガは、穏やかな笑みを浮かべていて、私は何故だか、訳が分からないほど口惜しくなった。

お前は何でも持っているくせに、どうして、どうして音楽を選んだんだ。何でもできるやつが此方に来るな。私からヴァイオリンを奪うな！

私にはこれ以外何もないのに、どうして私の邪魔ばかりするんだ！お前が家に転がり込んできたせいで、父も、母も、もう私を見てくれない。やっと認めてもらえるとと思ったのに……お前は私から全てを奪うつもりなのか！

「ずっと、弟が欲しいと思っていたんだ。ロキ、お前のことをもっと知りたい。聞かせてくれるか？」

ソーはやさしく私の頭を撫でながら、そう言った。その瞳はどこまでも慈しみに溢れていて、私のことを本当に愛しいと思っているように感じられた。どうしてそんな目で私を見るのか、甚だ疑問だった。ソーはもう18歳で、急に私のような他人の子供が弟になって、混乱しているだろう。疎ましいと思ってもおかしくない。それなのに、どうしてこんなふうに私にやさしく触れるのか、わからなかった。

私は、なんだか急に全てが馬鹿らしくなって、くだらない話をソーに聞かせ続けた。ソーも、音楽とは全く関係のない話をした。オーデインはフリッグに贈るアクセサリを小一時間考えていただとか、フリッグは花が好きで貰った花束は全てドライフラワーにするか、家の庭に植えていただとか。そんな、どうでもいい他人の思い出ばかりを私は覚えてしまった。演奏が上手くなる方法を探ろうとして、ソーに近づいたはずなのに、私はそんなくだらないことばかりに詳しくなっていた。会ったこともないソーの両親の話を聞いて、私は何故だか泣きたくなった。ソーの中に鮮明に残っているその人たちが、もうこの世にはいないのだということが途端に悲しくなった。オーデインとフリッグが私の演奏を聞いたら、どんなふうに評価してくれるのだろう。ソーは、フリッグが褒めてくれるから、彼女が好きだった曲を一人で練習して、ヴァイオリンを弾けるようになったらしい。

そんなふうに、誰に強制される訳でもなく、望んで音楽を始められたら、きっと弾くのが楽しいだろう。私は、ヴァイオリンを弾いていて楽しいなどと思ったことはなかった。私にとって演奏は義務であり、課された試練だった。私は楽しみのために演奏をするということを知らなかった。納得のいく演奏が出来れば、それなりに達成感は得られる。けれど、ソーのように、楽しそうにヴァイオリンを弾くことは、私には不可能だと思った。オーデインとフリッグの子に生まれていれば、何か違ったのだろうか。私が本当にソーの弟だったら、例えばヴァイオリンが上手に弾けなくても、愛してもらえたのだろうか。ソーの語る両親との思い出は、私には全て遠い宇宙での出来事のように思われた。私とソーは、はじめから全てが違っていった。私がソーの真似事をしたところで、その技術を身につけることができないことも、よくわかった。ソーの演奏は、恵まれた身体能力と記憶力。それに、幼少の頃から培った目と耳。そして、音楽を楽しむ心が合わさって成立しているものだ。私は、それらを持ち合わせていなかった。私にあるのは、苦しみと憎しみだけ。

私は、ソーを恨み切るには、ソーのことを知りすぎてしまった。ソーのことを兄として、愛したいと思った。けれど私には、誰かに愛された記憶がない。ソーのような幸福な思い出がないのだ。やはり、私はソーのことが羨ましかった。ソーの才能には遠く及ばないと知っていても、醜く足掻くことをやめられなかった。自分にできる唯一のことを手放す勇気がなかった。しかし、ソーと比べられながら、好きでもない音楽をやるという苦行に、いつまでも耐えられるほどの精神力も持ち合わせていなかった。

私は、12歳でヴァイオリンからチェロに転向した。両親はそれを止めようとはしなかったし、私もそんなものかと思った。

ただ、これでやっとソーと比べられる苦痛から離れられるという安堵と無関心な両親への冷たい諦観だけがあった。

チェロはヴァイオリン属の弦楽器だが、ヴァイオリンとは殆ど別物だと言っていい。ヴァイオリンは自分の右側に向かって高い音に移弦するが、チェロの場合は自分の右側に向かって低い弦に移弦する。音程の上昇、下降の感覚が全くの正反対なのだ。加えて、押弦する左手のポジションもフォームもヴァイオリンとは異なる。それに、チェロはとにかく弾くのに体力がいる。顎に挟んで演奏するヴァイオリンに比べれば、座って弾くことができるチェロの方が身体的負担は少ないはずなのに、どうしても長く弾くことができない。きっとヴァイオリンとは身体の使い方が違っているのだろう。チェロに必要な筋力が、私にはまだついていないのだ。そして何より、へ音記号への対応が難しい。ピアノをやっていたときの記憶を引き出して、何とか読むことはできるものの、その音階が手の動きと一致しない。ト音記号ならできた速読が、へ音記号では通用せず、楽譜を一通り読むのにも時間がかかる。それが私を余計に焦らせた。

父は楽譜を聖書のように扱い、楽譜通り完璧に弾くことを"正解"としていた。今の私には、楽譜を見ながら正確な音程で一曲弾き切るという当たり前のことすら困難だ。私はひたすら無力感に圧倒された。全てがゼロになってしまったような感覚。それが目の前を真っ暗にする。もがいても、もがいても一向に光が見えないような海の底にいるような気分だ。暗い海底に一人きり。そんな状況の私に進むべき道を指し示してくれる人はいない。両親はヴァイオリン奏者で、チェロは専門外だ。今までのように教えを乞うことはできない。私は指導者を求めて音楽学校へ入学することになった。母は私が寮でもやっていけるか心配してくれたが、父は相変わらず私には無関心だった。ソーは既にヴァイオリン奏者

として頭角を現し、コンクールでも金賞を取っていた。父はソーに付きっきりでイギリス全土を周り、とても忙しそうにしていた。私に構う暇などないのだろう。それはソーも同じだ。私が家を出ていくとき、ソーは留守にされていて、別れの言葉も言えなかった。けれど、それでよかったのかもしれない。私は、ソーから逃げた。あの天才と同じ土俵に立つことを恐れて、別の道を選んだ。その事実をソー本人に突きつけられることが、何より恐ろしかった。ソーの顔を見ないで済むなら、それが一番いい。そのはずなのに、何故だか、ソーに別れを惜しんで欲しいという気持ちが消えなかった。逃げ出したかったはずなのに、引き止めて欲しいという気持ちが涙として溢れて、止まらなくなった。私はすすり泣きを抑えながら、寮のベッドで眠った。

翌朝、一通の手紙が私宛に届いていた。差出人は、ソーだった。

——入学おめでとう、ロキ。本当はお前の顔を見て言いたかったんだが、時間が作れなかった。すまない。またお前の演奏を聞かせてくれ。楽しみにしている。お前がチェロ奏者になるなら、俺のヴァイオリンと合わせて二重奏ができるな。そのときは、二人でコンサートを開こう。俺たちならきっとコンサートホールを満員にできる。一緒に歓声を浴びよう。それまで、どうかチェロを続けてくれ。お前が選んだ新たな道に幸多からんことを。

私はしばらく、その短い手紙を抱き締めたまま、その場から動くことができなかった。ソーは、私の選択を逃げだとは思っていない。むしろ、新たな門出を祝福してくれている。それがとても嬉しいのに、何故だかひどく悲しい。私は、ソーの言葉を素直に受け止められなかった。私は、自分自身を恥じていた。ヴァイオリンからチェロに転向したことを、他でもない私自身が逃げだと思っていたから。

ああ、でも、ソーと肩を並べて二重奏ができたら、そのときは……私はもう自分を恥じなくていいのかもしれない。私はやっと、自分のことを好きになれるのかもしれない。

ソーの期待に応えたい。自分を愛せるようになりたい。私はそんな思いから、無我夢中でチェロの練習に明け暮れた。自由な時間は全て演奏に費やし、随分長い時間チェロを弾いていられるようになった。ソーに比べれば、私の努力など亀の歩みでしかない。それでも置いていかれたくなくて、必死に努力した。もがいて、もがいて、水底に差す光に手を伸ばした。それでも陸にはまだ遠く、音楽の道は果てがない。何度もやめてしまいたいと思った。全てを投げ出してしまいたいと思った。それでも、私にできるのは演奏だけで。それ以外に自分の存在価値を示す方法を知らなかった。

そして、私は18歳になった。一向に才能が芽吹かないまま、私は初めて会ったときのソーと同じ歳になってしまった。